（城西人文研究第13号）

『バシュラールと過したひと夏』とその研究（Ⅰ）

越坂部　則　道

『バシュラールと過したひと夏』の作者、ジャン・レスキュール（一九一二年九月一四日生）は詩人兼作家であり、芸術や映画関係でも幅広く活躍している文人であるが、小説にせよ、詩集にせよ、またおびただしい数の美術評論にせよ、彼の作品が一冊のまとまった形で日本に紹介されたことは私の知るかぎりいままでになかった。断片的な形では、バシュラールの作品『瞬間の直観』に附録として収められた彼の論文が日本語に翻訳されている。(1) そのために日本にはバシュラールの友人のひとりとしてその名前が入ってきたと言ってよいだろう。少なくともフランス文学関係者のあいだでは、詩人や作家としてよりも、バシュラールの研究者としてその名前が伝わったようである。そして今後も、余程のことがない限り、彼がその域を出ることはあるまいと思われる。

しかしバシュラール研究に関しては、その長い交際期間からもわかる通り、第一人者と言えるかもしれない。バシュラールの伝記的事実を知るうえでは重要な研究者である。その彼が長いあいだの沈黙を破って発表したのが『バシュラールと過したひと夏』であった。ここでは、彼の眼を通しているとはいえ、従来うかがい知ることのできなかったバシュラールの日常生活での内面性が、いたる所で如実に表現されており、バシュラール研究の資料としては非常に優れたものがある。

ところで本書の出版にあたって、フランスではひとつの事件がもち上がった。ガストン・バシュラールの遺子、ス

ザンヌ・バシュラールが出版と同時に本書の差押を求めて告訴したのである。バシュラールの作品のアンソロジーと彼の遺稿『フェニックスの詩学』序論がスザンヌの承諾なしで本書に収められていたからである。ただちに本書は配送停止処分を受けた。しかしながら未完のまま絶筆となったと思われる『フェニックスの詩学』（レスキュールはこの作品が完成していたのではないかと本書のなかで述べている）の発表こそ、長いあいだ、研究者の待ち焦がれていたことであり、スザンヌはどのような理由からかわからないが、二〇年以上にわたってその発表を拒否し続けているのである。本書の受けた処分はまことに残念なことと言わなければならない。作者のレスキュールと出版社側はただちに問題の箇所を削除し、そこにスザンヌとのやりとりなど事件の経緯を埋草として記し、三ヵ月後（一九八三年九月）に新版を出版した。言うまでもなく、ここで用いた原本は初版ではなく、新版の方である。(2)

バシュラールと過したひと夏

ジャン・レスキュール

I　序論

方法論

「ことばには羊飼が必要である」
バシュラール

一五年来、私はバシュラールに関する本を書かねばならないと自分に言いきかせてきた。しかし一五年このかた、

そんなことをする必要はないというのが私には自明の理だったのである。私はこの問題を避けた。というより気が抜けたと言う方が適切かもしれない。しかしバシュラールを読み直すうちに（そして絶えずバシュラールに戻るうちに）、私のなかでその気が膨らんできた。私は書こうと思う。私をその気にさせた沢山の証拠が後になると出てくるだろう。しかし本を書くこと、それも真剣で、勤勉で、体系をととのえて、思慮に富み、「知識」あふれる真の本を書くことは、一五年前から嫌だった。私は友だちにせき立てられた。待っているのだ。それでも私が書き始めないことに、彼らは驚いた。彼らにはわからない。私のことを悪く思ったことだろう。

私がこの本と首引になれなかったのは事実である。仕事が忙しすぎていとも簡単に本から離れた。喜んでそれを口実にした。いつの日にか……と思ったのである。

偶然起ったことでさらに言わなければならないことが沢山ある。それはときおり非常に素早く逃げ去るので、はたして本当に体験したことなのかどうか、数年後になるとわからなくなるような特権的瞬間についてである。それはある晩に起きた出会である。ファニー・ベルショーが催したある夕食の席で、私たちは映画の話をすることになっていた。突然バシュラールの話が出た。しようと思えば私には彼についてさまざまな話ができたのである。多少機械のように、もとめに応じて私はさまざまな話をした。その晩、話相手と私は、突然の劇的で緊急なるバシュラールの出現に深く没頭したものだった。神秘的で、思いがけなく、それだけに多分感動的で、驚くべき出会。人生においてめったに起らないような出会のなかのひとつであるが、そういったことは確かにありうるし、どのような深さから生じるのかわからないが、そこでは感嘆の一致、アニマ(3)の共感といったものと同様に過去の欠如から生まれる強さ、意図的でない暗黙の合意が一挙に表わされるようになる。私は仕事やおしゃべりなどの日常世界とは完全にかけ離れた、漂うような感情を何日も忘れなかった。それからしばらくしてこの感情もまた消えてしまった。数週間後、一通の手紙が届いた。申し分のない手紙だった。ただちに返事を書かなければならなかった。また当時は書ける状態にもあっ

た。それでもすぐに返事を書くことができなかった。私のなかで何かがぴんと張りつめ、もはやそれをゆるめられないのがわかった。二年後、私はジェラール・ギシュトーに手紙の礼を言い、この本を書き始めたばかりである旨を伝えた。私たちはそれから再会することがなかったし、彼は返事をくれなかった。おそらく返事は必要ないことがわかっていたのだろう。しかしこの本があるのはひとえに彼のおかげである。したがってこの本の幾分かを彼に捧げるのは充分当然なことである。私を勇気づけるようなふりをし、私の異論を取り除くようなふりをしながら、彼のことばはまず第一に後めたい気持を私に植え付けた。友情に伴う一種の義務について話したのである。

この本を書かなかった理由

最初に非常に雑然とした「私自身の話」をしてみよう。

この本を書きたいと思っていたことはすでに書いた。この思いは非常に強かったので、明確な理由から断念するのでないかぎり、この本から離れることができなかった。決心するにあたって体験した私の優柔不断、当初の無力感は慎重さであり、同じペースでこの仕事ができないと長いあいだ思ってきた。この本は私には難しすぎる。充分な才能が自分には感じられなかった（本を書くにはある程度の才能が必要にちがいないと思っていた）。「規範」、いわゆる哲学の備わった、充分に熟成した理解力を駆使できないものと自分で思い込んでいた。事態をことさら難しくしたのである。それに自分でもよく見分けのつかないひとつの企て（これについて私は全く型にはまったひとつの考え方をいだいてきたと、いまでは理解している）に対して私の持っている道具が上手に適応しないため、絶えず慎重に後戻を考えてきた。今日でも、この「考え方」が私にとってバシュラールを表象するものに逆行するという漠とした感情から嫌気が生じたのではないかと怪しんでいる。批評家および解釈学者の態度を参照にして、この種の研究条件は作品の意味の固定化に通じ、研究の中断は意味のグローバル化につまり体系化に通じると、私は漠然と考えた。二五年間以上もの友情

のために非常にしっかりと植え付けられた評価や動きの思考力に代わって、体系（しかもそれを整えることはできないと自分で感じた）を用いる方法は私には耐えられなかった。それを承知するならば私には罪があると自分で思うようになったことだろう。一種の墓掘人夫になるという考え方にまといつかれたのである。

さらに付け加えておくと、「説明されたバシュラール」を書くために、バシュラールが自分自身に与えた形とは別の形を彼の思想に与えようとしなければならなかった。こうした思いに私は苦笑せざるをえなかった。ポエジーというものは表現されないのに、どのようなことば、どのような文体のなかにもポエジーが、すなわち、ことばで表現できないものがあり、ことにバシュラールの作品にはこのポエジーが沢山あるというかつて私のいだいた確信―いまも変らずにそう思っている―のおかげで、私は原文を説明するさい教科書的なあやまりを冒さないで済んだのである。どのようなポエジーにも謎があるのに（ことばで表現できないその性格がすでに謎になる）、どのような表現も謎から謎への付け足しにしかならず、問題の問題を作ることしかできない。

そうなのだ、告白してしまえば、考えるに、おまえが書くのはバシュラールについてではなく、彼がおまえに与えたよろこびについてである。おまえが望んでいるのはこのよろこびを蘇らせる理由であり、増大したよろこびを作品から引き出す方法、それも多分方法論的な、研ぎ澄まされた方法なのである。

そういったこともまた私を不快にした。おそらく私は間違っていたのだ。要するにバシュラールは幸福になることを教えてくれた―教えようと試みた―のである。私たちの出会はこの幸福の一部分をなしていた。この本に取りかかるにあたって自分に禁じたことは、結局のところ、したいと思ってもモンターニュ―サント―ジュヌヴィエーヴ通り[4]におしゃべりに行くことがもはやできないという不幸と、永遠に続くと信じた彼との対話をいまもなお追い求めたいという欲求、この真の動機だけから本を書きたい気持が出てくることだった。本を書くことが私を彼から解放してしまうのではないか、あの出会の終焉とかつて私がいだいた欲求の終焉を記すのではないかとおろかにも心配し

た。

実を言うと死はこの対話を中断させなかった。私は絶えず対話を取り戻したのである。常に不充分な形で読まれてきた本が私に対話を申し出た。くり返し、くり返し絶えず本を参照した。決して同じ読み方をしなかった。いつも私は驚かされ、本に新しい質問をした。本は答えてくれたのである。

こうして私を救ってくれるはずの見解に近づいた。とりわけ哲学に対する私の無知から、本書がとることのできなかった姿と、バシュラールの体験した詩学（この分野で私はひとりの哲学者以上の訓練を重ねた）の魅惑から、本書がとるべきでなかった姿を理解するところまで来たようだ。ときおり本書がとるべきだったかもしれない、そしてとりえたかもしれない姿を予想した。私の記した日記のなかにその痕跡がある。

たまたま付けた日記

私はこれから頻繁にこの日記を用いなければならないので、これについて一言。これは本当の意味での「日記」ではない。定期的には付けていない。好きなときに書いている。偶然や気まぐれを除くと、少なくとも一日の出来事のうち、めったにないような何かが起きたとき、その必要に応じて書いている。たまたま出会った事をそこに詳しく記載することがある。耳のなかにまだはっきり残っていることば、いわゆる「悪口」のために、かっとなることもある。

さらにその上、数年後にその出会を思い出させてくれることがあり、また時間が経っておそらくすっかり変貌した事を書くこともある。ときどき離れた日付で、しかも非常に違った態度で語られた同じ話を日記のなかに見い出すことがある。

結局出来事や人間が日記のなかで本質的な位置を占めることはない。むしろ孤独な日記である。充分すぎるほどの時間を割いた、つまらない利害関係やささやかな喧噪をひとたび避けたならば、それは孤独な幸福への回帰になる。

そこで特に気に入って語る人々は、私が好んで孤独のなかに誘う人たちであり、打明話をする人たちであり、私を静かに燃え上らせるような友情を持った人たちである。私は遠慮せずに好きなだけ彼らに質問をする。驚くべきことに、不在しているはずの彼らが私に答えるのである。しかしながら彼らは従順ではない。逆に多くの場合かたくなになり、今度は彼らが私に疑問をだし、私は夢のなかに浸る。この三・四千ページを読み返すことはほとんどない。出版するために書くのではなく、書くこと（エクリチュール）、つまり世界を言語世界にむりやり置きかえるという手段を利用しながら、生きるために書くのである。日記のなかで私の持続を自分に語る。だから私の死をも語るのだ。そこで愛する人たちといっしょに暮す。彼らの死といっしょに暮すことさえある。

日記にはバシュラールのことが頻繁に話題に上っている。しかも彼が死んだ後はそれがいっそう頻繁になる。それ以前は、彼に会って、おしゃべりを続けることが無限に続くような、おろかな確信をいだいたため、彼が私に言ったことを控えるのはなおざりにした。白状しなければならないのは、生意気にも、この私が彼に言ったことはあの彼が言ったことと同じように重要なこととみなしていた事実である。私たちは同僚なんだと彼は私に思い込ませた。私は少しも弟子ではなかった。あのゲーテのエッケルマン[5]のように自分を感じたことはなかった。ああ、彼の精神とポエジーを私自身の詩篇のエネルギーにするよりも、彼の話を控えることでその精神とポエジーのために尽す方がよかっただろう。残念である。私はおろか者だ。しかしバシュラールは弟子など問題にせず、反対に、彼が言ったように私が生徒になることを彼は望んでいた。彼は私を教育した、それは確かである。「ことばの高さへの開示」という言語活動を彼は掲げようとしたが、その高さにまで私自身を高めること以外に、もっと上手に彼にそのことを示す方法があるだろうか。

したがってこれはいつわりの日記であり―しかし私には良き伴侶である―、読書や風景や季節を相手にしている。私はここで精神を固有の存在に整理するはずの書く行為（エクリチュール）という道具を行使する。この「日記」は私が最初に言ったこ

との証拠をもたらしてくれるので、ここでは役に立つだろう。それが意味するものはもっと後になればわかると思う。私は自分の動揺のいくつかの痕跡を日記のなかに見つけたが、それは一九六五年の春であった。

日記の断章

バシュラールについて語り、彼の作品を説明するのにもっとも良い方法は作品を極端に体系化することだとは思わない。彼は体系的なものをひどく嫌った。体系はやめなさいと、いつの日だったかは忘れたが、私に言った。体系的なものを少しでも押し進めるならば、多分途中でそれに頭を下げるようになるし、またわれわれの世界にすぐはいりこんで来るようになるだろう。

合理主義者になるという意志のため、彼は体系的なものに欺かれることがなかった。私は詩的行為について不合理なことを語り、彼をいらいらさせたことがあった。彼が情熱をこめて捧げた理性の本質は働くことにあり、一九三六年すでに言ったように「理性はたったいま碇を上げられたばかりであり」、しかも「人間の理性に騒々しさと攻撃性を回復させなければならない」（『超合理主義』、アンキジシオン誌[6]）ことを発見するところにあった。

したがって私の考える良い方法とは、行為を体験しようとすることであり、精神の進展に加担して、世界のなかで世界とともに進む態度をとろうとすることのように思われる。そこへ至るにはそれを否定することだろう。それがめざすものは自らを受け入れるのと同様に自らを拒否する—精神化した—自然である。自己自身を削除しながら自己自身を構成したのは誰なのかと私は言いたい。

ことばの助けを借りるため、あまり上手にはいかないが、ジッドを引用することにした。自分の性向にしたがうことが「のぼりながら行われるのであるならば」、それは「さかのぼりながら」行われたのである。バシュラール

にとって、実際人間は自分自身に譲歩するのと同じだけ自分自身に反対しながら自分自身になったのである。人間は過去の総和ではなくて、継続的な発見のなかに自らをあらわすものだと確信し、その彼にとって重要なことは、人が譲歩したものでも人が反対したものでもなく、もっとも上手に驚かすことのできた行為が同意なのか拒絶なのかを知ることであった。

あるがままの存在を決定するのは譲歩する人間でも反対する人間でもない。それは、譲歩したり反対したりした後で各人がなるところのものである。人間が譲歩しようと反対しようと、バシュラール（自分のなかに容赦なくはいりこんで来る情念への不信感から、彼はといえば、ますます反対する方向にむかっていた）は、いずれにしても、人間が自分自身のなかに閉じこもるのと同時に自分自身を変えることが可能だと考えて、人間を充分に信頼していた。

彼が人間のなかで素晴しいと思ったものは自分自身になると同時に他者になる力、自分自身になると同時に自分自身以上のものになる力であり、新しい段階を越えて新しい世界に自らを開く準備を常にしながら、そして進歩の縁で常に迷いながら、あるがままのものになると同時にあるがままのもの以上になる力をもっていることである。

発展、前進は彼にとって人間の本性でさえあった。彼は一般的な考え方に反して、芸術のなかに発展性があると主張してはばからなかった。人間は前進するものであり、あるいは自らを前進させるものであると言い切ることが彼にはできただろう。

未来そのものを人間に与える時間、存在し、存在することができ、それ以上のものになるべき時間、この時間のなかにあるという幸福がまさしく彼の人生である。バシュラールの時間からすれば生きることは素晴らしいことであった。

数カ月後、バシュラールの考えたこの人間の限りなき未来が私をいっそうおびやかすことになった。

私はバシュラールに関する「真面目な」作品を決して書けないような気がする。本の章を整えるという考え方そのものから私は一種の絶望感で一杯になる。もしそれをしたならば作品を駄目にしてしまうと思われるし、生きた思考のなかには動きを止めて体系化できるものなど何もないということだ。誰もが彼に負けず劣らず自分の鍵を見つけて、それを知り、所有したという気がするものである。しかし彼が何か命題を批判したときは、おそらく真理であろうと思われるものとその鍵とを比較しながら行うのではなく、その命題が道をふさいでいるように思われ、もはや前進するのを許さないように思われたからである。あらゆる断言はなによりもまず彼には疑わしくみえた、というのはその断言が異議を唱える気力を失わせようとするからである。自分自身のために、徹夜した朝の精神の高揚のために、そして作品への静かな情熱のために、彼は研究方法を広げたいと思っていた。思いがけない見通しを指摘されたり、意表をついて道が開かれたことに気づいたとき、彼は眼を輝かせた。それは他人に対してもっとも気を使う彼がしばしのあいだ眼前に人がいることを忘れて、夢の彼方の、他の場所に猛然と出かけて行ってしまう唯一の瞬間であった。しばらくすると彼は我にかえってふたたび手を取ったのである。

私はこの作品の至る所に絶えず存在の力、開かれた道の力強さを見い出す。作品が理性の長い連鎖を展開させるときでさえそうである。得たと思った知識が、どのような眩暈だかわからないが、その眩暈の縁に私を誘い込むような力でしかなく、それを前にすると知識が救いの手を引っ込めてしまい、結局その水準を越えるべきだということがわかるようになって、ようやく私には彼の笑い声が聞こえてくる。しかしそれがポエジーではないのか。ポエジーが持っているとみせかける「知識」ではないのか。

一九七四年九月、私はジャック・デュシャトーとジャック・バンスといっしょにパンプロンヌ[7]に戻った。私たちはバシュラールの話をした。やむを得ずに。私はもはやこの本のことを考えもしなかった。しかし私たちの出会を蘇ら

せる方法が見つかっていた。彼の本を読むことを私は学んだのである。

バシュラールが語るのを聞くように彼を読まなければならないだろう、それも読んだ後に来るものを待ちながら、それを決してさえぎらないようにしながら、である。この後に来るものが彼の人生を総体化し、締めくくるので、彼が死んだ後は、作品を秩序立てて考え、作品から一貫性を引き出し、作品を体系化しながら、その作品を読みたくなる。しかし作品のなかには過度の秩序と章と計画を入れないように気をつけなければならない、というのはこの作品が、自ら進み、自らを発見するように自覚させながら他者以上のものに自らを発展させたのであり、方法論的に存在の縁に自らを向かわせたかったのである。「詩人は存在の縁で語るのだ。」(8)（『空間の詩学』）

ひとりの女の子が『ロートレアモン』でバカロレアの試験の準備をしていたとき、彼女が読まなければならない本について私はバシュラールに尋ねたことがあった。「なに、『空間の詩学』を読みなさい。それで充分ですよ。」と彼女を安心させるために彼は言った。彼が強く主張したことは、彼女がぐったりするほど意味のない読書を重ねないようにすることであり、とりわけ彼女が学び方を学ぶことであり、そして自分で見い出すことのできるもの以外には何の価値もないということであった。彼はそう言い切って大いに笑った。しかし私の哲学にとって、自らを導くのにふさわしい存在の縁、存在の境界の感触を私のなかで維持するには、実際彼の本をくり返し、くり返し読むこと、常に新たな気持で読むことで満たされると私には思われる。

今日このようなこと（くり返して読んだことがほとんどないと何度も言わなければならないこと）を思い出すと、一体どのようなブレーキが強く働いて私を制止したのか不思議である。というのは、しなければならなかったことを私は自覚するにとどまっていたからである。わずかばかりの注意力や適応力で結果を引き出そうとするならば、今日の私には

ごく当然のことと思われる方法を引き出すことができたはずだ。それは多分、精神―いずれにしても私の精神―が自分の言うことを理解しないままに自分の道を行くからである。ことばは常にことばの意味よりも先にあり、言語は言語が意味するものに先立つ。いままでは言語は思考の後に続き、そして思考を表現するような気がしていた。私の考えはその点で変わったといえよう。当時は言語を思考と同次元のものとみなし、言語のなかだけで思考が変わり、思考が行われると考えたのである。そのことをさらに疑わなければならない。ことばは最初に理解される以上のものを、決して理解されないものを含んでいるということをわれわれに示すところにポエジーがあり、ことばの力を広げるには、インスピレーションの輝きがわかるようになるよりも、もっと沢山の時間が必要である。要するにひとつの定理に含まれた知識でさえその定理を言い尽すことができず、さらにそこから何か別のものを引き出すことができるのだ。それは疑問の疑問であり、おそらく偶然の疑問である。

私は自ら進む精神が取るべき方法に戻ろうと思う。特に詩的精神を問題にする。私が戻るのはバシュラールが自分の著作に対して行った読書、すべてを書き直したいと思ったほど彼を驚かせた読書にである。本を書いていたとき彼は自分でも理解していなかったと言う以外にどう言ったらよいだろう。いずれにしてもこの私が日記のなかで言ったことを私自身理解できなかったし、真に理解していなかったのである。

ほとんど体系的でない方法

「…思考の王国では軽率さがひとつの方法である。」(9)

バシュラール

以上のことが私にはわかった（あるいは以上のことが私にはわかっていなかったということがわかった）とき、その結果は明らかなことのように思われた。発見する目的で書かなければならなかったのだ。驚きから驚きへ、書き直す必要

があった。絶えず書かなければならなかった。体系をあれほど激しく敵視したあの哲学者に、そして詩篇を決して書くつもりのなかったあの詩人に、詩的生命を一致させなければならなかった。この詩的生命はわれわれの誰もが体験できるものである、というのもポエジーとは単に存在の広がりであって、定理に置きかえられるかもしれないようなもっとも些細な意味さえ、もっとも些細な知識さえ定理のなかに閉じ込めようとはせず、手短に言うと、ポエジーとは絶えず突飛な意味をわれわれに見せてくれるものだからである。

考えるに私はそのようなことを全部知っているはずだった。実際私は自分を驚かしながら常にバシュラールを読んできた。くり返しながら一番多く読んだ本のページでさえそのたびごとに私には新しいものだったし、暗記した文章でさえ、そのひとつひとつの思い出、いまだかつて聞いたことのない響き、反響で私を驚かしたのである。しかし今度は書くことに移らなければならなかった、書くことは私の読書と等しくなければならず、絶えず驚きながら書くようにしなければならず、結局観念を定義しないように、概念を固定化しないように気をつけなければならなかった。

この驚きを方法に昇格させる必要があった。

バシュラールはそこに私を誘ってくれなかったのだろうか。そこにもまた困難なことがなかったのだろうか。しかも彼の遭遇した困難が。彼が『夢想の詩学』の冒頭で引用したことば「方法よ、方法よ、私にどうしろと言うのか。私が無意識の木の実を食べたことはおまえにはよくわかっているのに。」はラフォルグ[10]の文章ではなかったのか。バシュラールは私の意識を非常に強く、非常に長い間あおり立て、軽率さの力をごく自然に高揚させたので、彼を裏切らないために、この軽率さそのものの方法を作らなければならないと感じた。私の語ったノートにはこの方法の最初の痕跡が示されていた。そこで見い出された「読書―書くこと」に関して絶えず驚きが記されていたのである。しかしそこでくり返したことは私の記憶になかった。何度も読んだことを何も覚えていないことがよくわかった。そこで思い出されるのは笑いであり、ことばであり、身振りであるが、それらは感情の対象のなかの謎のような部分を表

わすものなので、知識（コネートル）を構成するのに一番適さず、一番消えやすい事柄であった。

何だって、これが方法なのか。この方法を完成させずにどうやって定義するのか、この方法の限界を示さずにどうやって明確に示すのか。ポエジーというものに方法はあるのだろうか。私はこのポエジーにバシュラールの通った道を通させたかったのである、つまりそれは表象に対して想像的なもの、過去の思い出に対して未来の記憶、持続に対して瞬間、水平と流れに対して垂直と噴出、結果とその連鎖に対して侵入と到来、といった道である。

しかしこの方法をあまり明確化しすぎるならば、なんらかの鋳型を作るおそれがあり、活気づいた思考がその鋳型のなかで窮屈に変形してしまうようにならないだろうか。もし私が「開示した」と書いたならば、それは多分私がどこへ行くのかもわからずに書いたのである。おそらく口ごもったのだ。しかしながらこの「わからずに」に私はすがりつかなければならなかった。バシュラールを出発点でふたたび見い出すために。それも、考える、あるいは夢を見る行動の出発点で。そして最初の出会のなか、彼と過した私をふたたび見い出すために、「根本的なことばのなかで生きる…」(11)（『ろうそくの焔』）のである。

なんと頻繁に私は彼を訪問したのだろう。そして夏の静かな朝、読みながら書くようにという彼の忠告にしたがって彼に手紙を書いたのだろう。

バシュラールと過したひと夏

「私にとって夏は花束の季節である。夏は花束、それもしおれることのない永遠の花束である。というのも夏の象徴はいつも若さだからである、それは新しく、新鮮な供物である。」(12)

バシュラール

私はバシュラールとひと夏を過したことは一度もなかった。しかし私はバシュラールと四〇年以上にわたる夏を過した。私たちが同じ場所でヴァカンスの時間を共にしたことがなかったのは事実である。一方で、バシュラールの本が夜明けに私の机上にないというヴァカンスを一度も過さなかったのは事実である。

一年のこの時期、ふつう彼は少し庭の荒れた、ディジョンのなつかしい家にいた。私はどこかの田舎にいた。ただし彼の最後の夏は別であった。ディジョンにいるものと思っていたが、健康状態を考えて彼はあの家に行くことを思いとどまり、パリにいた、おそらく移動距離と家の荒廃のために彼の気持はその家から少し離れたように思われる。彼は私がレ島[13]にいるものと思っていた。私に手紙を書いたのだ。しかしその手紙は私に転送されなかった。

スザンヌは相変らずアグレガションの試験官として朝晩働いています。月末まで続くでしょう。その後娘はここを片付けたがっています。その後にディジョンへ行くでしょう。私は恐いのです。モベール広場[14]と同じくらい人間味のある場所は他のどこへ行けば見つかるのでしょう。

この手紙は一九六二年七月二三日付であった。彼は死の床にあった。[15]

このタイトルが心の中に浮んだのは私を見放したあの夏（あるいは私にとって存在と不在の交錯を永遠に刻むことになったあの夏）の思い出からだろうか。あるいは私にとって長いあいだ、一年のこの時期が日常の仕事から解放されて本を読むよろこび―それもノートを開き、万年筆を手にしながら読むよろこびに、明け方からひたることのできた時だったからだろうか。ノートを開いて本を読むことは、ほとんど本を閉じながら読むことである。子供たちには本を開きながら読む読書を自分勝手に教え込んでいる。しかしノートを開いて本を閉じながら読み続ける読書はなんて美しいのだろう。魂の中に投げ入れられたばかりのことばが容易に消えず、逆にそのことばが活気づき、漠然とはしてい

るが興奮するような発見をして魂が共鳴するのである。

夏それは、あふれんばかりの光がよろい戸を通してさしこみ、本の輪郭がその横に影をうつすようになると、うす暗がりのなかで食堂のざわめきが（日陰とその涼しさの好きな母のすべすべした手がよろい戸を朝早く開けるので）聞こえる（昔）の時期でもある。この時期のことで思い出すのは、はえがぶんぶんと飛んでいる様であり、少なくとも三本脚の付いた丸い酢のびんのなかで、これらのはえの死体が浮いていることはない、そしてこの酢のびんの底はえぐったようになり、黒い島のようなものを散りばめた紫色の輪がみえ、そこが丸味をおびていた。

夏になると季節の最後にひそかな秘密ができる。夏は体を動かさずに旅をする時期であり、暑さの最中、たったひとり書斎のなかで本と過し、どのような季節へも逃げ込むことのできる夢想の時期である。

バシュラールと過した最初の夏は（私がはじめて彼と過したのは）『持続の弁証法』とであった。一九三七年の冬、雪のなかであった。私はそれまで一度もバシュラールに会ったことがなかったのである。

最初の出会

オーストリア出身で戦争中に亡くなった印刷人兼発行人のヴァルテル・ウールはアンドレ・シルヴェールの編集した雑誌『メサージュ』を出版した。この雑誌は若々しい詩篇についての見事な概要をのせた。しかしヴァルテル・ウールはさらに野心的なものを望んでいた。奇妙なことに私は哲学的な精神をもつ人間とみなされていた。それが強い印象を与えたのだろう。私は雑誌を任された。第一号を、皆が読みもしないのによく論じた流行の作家、ウィリアム・ブレイクに当てたのである。私はこの出版物の意味をもっと強調したかったので、第二号（一九三九年に出版された）では、「形而上学とポエジー」というテーマで作品を集めようと思った。

私は『持続の弁証法』を読んでいた。ジャン・ヴァール[16]が作者の住所を教えてくれたのである。そこで彼に手紙を書いた。無口で警戒心の強そうな娘のスザンヌを連れて彼が会いに来た。それは一九三八年の夏の終りであった。最初彼はひどく他人行儀に私と話をして、ほとんど堅苦しさのなかった当時の私のことを真面目に社長と呼んだ。しかし帰ろうとして立ち上がり、ドアのそばまで行ったとき、いきなり私に尋ねた。「それはさておき、あなたは何か資格をもっていますか。」私の世代にはときどきいるのだが、一か八かの人生を送るつもりで、公務員のような月給をもらう生き方を拒み、いつも気をつけて試験をさぼるようにしていたので、私は何の資格も持っていなかった。私は多少攻撃的に答えた。「何も。」「ああ、それは残念だ。もしぼくの生徒だったなら、いまではあなたは博士になっていますよ。」とバシュラールがなげいた。「で、それで何が変わるのでしょうか。」と今度は皮肉な抑揚をこめて私が言った。彼は両手を上げながら叫んだ。「何も。何も変わりません。でも名誉（アバンタージュ）なことですよ。」彼の生まれたシャンパーニュ地方の重い感じのアの発音がいまでも耳に残っている。

方法への回帰

「絵に付随しているもの、それはいつも、まるで一度もその絵を見たことがなかったかのように思うものである」とピカソは言った。

エレーヌ・パルムラン『ピカソへの旅』

この本を書くために、そして生命は常に前進しており、常に一個の「前進」であると明言したひとりの人間と幾多の夏を過すために、昔の日々の過ぎ去った幸福へ、また「古き良き時代」の思い出へと私を連れ戻すやさしいメランコリーの誘惑から、自分の身を守らなければならなかった。「ほほえみながらの悔恨[17]」も拒絶しなければならなかっ

た。記憶のおとし穴はおびただしくある。「記憶、なんという墓場」というマルローの叫び声を、バシュラールならば自分で処理できただろう。彼は思い出にほとんど気を奪われなかった。たとえ彼の作品のなかにその痕跡を見い出すことができるとしても、一般に彼が思い出すのは気晴しのためである。思い出が彼のなかに広がると、不安になりながらも過去の出現に立ち向うのである。『水と夢』では、「非常にやさしく非常に青白い月の光」が記憶の「波の上にふたたび」妄想をかり立て、この妄想を追払おうとする詩人のつらい仕事の物語[18]のなかに、そのことがそれとなく出ている。同様に『大地と休息の夢想』では、「その日、なぜもっと以前に読んでおかなかったのか私にはわかるのだ」[19]ということばのなかに、それが出ている。

追払わなければいけないのはただ単に思い出ではなく、再記憶化としての記憶、再呈示としての記憶である。バシュラールを悩まし、彼の考察を防げ、想像力をふさいでしまうのがこの記憶である。それは新しいものの代りに既知のものを用いる。それが思い起させるのは死んだもの、硬直したものである。そしてこれからなろうとするものの入り込む余地がなくなる。それは生きることから関心をそらせるのだ。思い出す人間は知ることに満足し、思い出を供給する知識のしるしに満足するのである。

このような人間は、現在という時間のなかで、精神を鎮めて、自らの眩暈に立ち向かう気をなくさせる観念を考え、それ以外のものを考えないで済ませるのだ。

「読むたびごとに、私には新しい本を初めて読むような気がする……」
イタロ・カルヴィーノ[20]『もし冬の夜にひとりの旅人が……』

この夏バシュラールと過すために、すでに読んだ文章だと決して認めないように、すでに読んだ文章の後に続くこ

とばを決して思い出さないようにしなければならなかった。章の終りにさしかかって私の考えていた事とはまったく異なる事を発見して驚き、はじめてそれがわかるようになる必要があった。見知らぬ手紙を受け取ったときのようにである。そして神の啓示のようにである。

したがってここでは話のくり返しが、しかもほとんど、くどいと思われる話がみられるだろう。私はその弁解をしようとは思わない。ただ、注意深い読者に対して、なんらかのほんのささいな（あるいはささいすぎるかもしれないような）相違に気をつけるようにと言っておきたい、同じ単語、同じことばから、さらに言うなれば実存行為から生じた意識のなかでは、このちょっとした相違だけでもなんらかの進歩を記すには充分だと思われた。それ以上に私は注意深い読者に対して、同じことばを二度以上読むように、そしてことばが同じものだとは認めないようにと言っておきたい。私は自分に都合よく行っているのだろうか。それほどでもないと思う、というのは、読者がここでは作者になるように、またバシュラールの語った「読者の思い上り」を体験するように、多分ほとんど記述できないなんらかの方法で、読者を導かなければならないからである。

記憶と二度目の読書

「…人間の理性に喧噪と攻撃性の働きを返さなければならない。」(6)

バシュラール

したがって私は記憶のおとし穴に気をつけねばならなかった。記憶が実存と精神のあいだのスクリーンになることができる（おそらく、おしなべてそのようになるだろう）こと、精神が現在的なものになるために行う努力を、記憶が実存に止めさせてしまうこと、記憶が実存のなかにいつわりの光をともし、この光のせいで実存はばくぜんとしたかす

かな記憶を発見したと思い込むこと、記憶が実存のなかに早まった認知をあまりにも簡単に吹き込み、そのせいで実存はファンタスティックな新しさの代わりに既視体験を用いること、そういったことに注意しなければならない。それに、形成された意識が豊かになり、洗練されるのはそれほど重大な現実の不足からではないことにも注意しなければならない。

一〇回、一〇〇回と読まれた文章が初めて読まれたときと同じだけ新しく、汚れなく、思いがけないものに私に映るようにするために、それ以上にもっと新しく、汚れなく、思いがけなくするために、またその斬新さが積み重ねられた体験で豊かになるようにするために、また、不意を打たれて唖然とすることが重なり、その思いがけなさを強化してゆくために、実存の痕跡をいわば指数方式で実存に付け加え、具体的な実存として創造しながら、思い出すという行為をそれ以上に拒絶しなければならない。

文学は二度目の読書で始まるとバシュラール[21]が言ったのは、作品をくり返し読むならば、あるいは作品を注意深く研究しなおすならば、作品についての知識が深まるだろうということを意味するのではない。最初の読書では理解できなかった科学的な作品でも二度目の読書ならば理解できるだろうし、むしろそのような作品も最初に真の読書をすれば理解できるようになるだろう。作品が理解されるまで―わかるようになるまで―、実際その作品は読まれてはおらず、真に読まれたことにならないと考えられる。科学的な作品が知識に変化したときになってはじめてそれは読まれたことになる。しかしそのとき作品は消滅する。作品の意味に。

それとは反対に、文学における二度目の読書とは、消滅する（支えるものが物理的に破壊されて明らかに作品以外のもの、あるいは別のものになる）可能性から作品が永久に免れるような読み方である。作品の話振りから明白に形成されると思われるいくつかの考えを作品から取り除くことで、作品の謎のような果てしない存在を引締まったものにする。作品の意味を完全にしたり正確にしたりするために最初の読書を思い出しながら二度目の読書をすることは問題

にならない。

わが読者がこの作品を読み終えたとしても、読者の知識は何もふえないだろう。[22]（『火の精神分析』）

最初の読書では作品の忘却が準備される。二回目の読書ではこの最初のときに生じた知識から安心感が奪い取られ、意味が作品のなかで絶えず揺れるようになる。意味あるいは思い出さらには感情など、作品自体から、また真の読書からそれたものを作品から一掃しながら、そして便利な「私にはわかる」とか安心感をもたらすような「私は認める」とか「私はそこに自分の姿を認める」ということばで作品を硬直させるものを取り消しながら、さらに作品をおおい隠すものを忘れられるようになって、この二回目の読書はまさしく、詩人の要求するものとは「別のもの」を促し、不在としてよりも未来として、状態としてよりも振れとして置かれたこの「別のもの」を促すのである。「意識がゆれる」とバシュラールは言った。

ことばへの愛情

このようなことから、思想を託すことに慣れている散文を取扱う際、ポエジーの力をそこに見い出すようにしなければならなかった。とはいってもそれは厳密でインスピレーションに満ちた詩篇の力ではなく、むしろ会話の途中、声の抑揚のなかに響きや言いよどみや洗練されていない言回しを入れるという、地味なポエジーである。「人間には詩的運命がある[23]」ということばを読んだとき、古いロマン派の姿勢がどれほど私をまどわしてきたのか理解できたように思われた。一九四二年三月に再開された『メサージュ』の第一号で、私はこのことばを挑発するように引用した。いまではこの詩的運命があらゆる瞬間にあると私は理解している。それは多分自然なものではなく、バシュラー

ルがおそらく意味したような超自然的なものであり、またことばに対してそっと感嘆したために生じた産物であろう。優雅なものや雄々しいものは何もなく、ショーウインドーに飾るようなものでもなく、むしろ言語のもつ密やかさのなかで生きるための、ひかえ目な配慮といえよう。

私の方法はことばにもっとも素朴な注意を向けることで完全になった。「私はことばが好きだ」と舌鼓を打つようにバシュラールが私に言ったことがある。私は彼のことばが好きだった。配慮したことばが、そして今この私のテーブルの上で数ページにわたって配慮しつつあることばがである、それも今であり、常に私の未来の幸福に向ってである。

友情から方法としてのポエジー

一九三八年バシュラールは例の出会を終えたあと、私の計画に応じてくれた。彼は数ページの論文を書くことを約束してくれたのである。それが『詩的瞬間と形而上学的瞬間』である。本質的に考えてみれば、この作品が『持続の弁証法』の影響下にあるというのはありえることだ。しかし確実ではない。そこから生まれたことが必要なのではない。ところでバシュラールの次のような告白にはおそらく意味付けをする必要があるだろう（『ユロップ・アン』が「友情のリレー」を思いついた。ひとりの人物がひとりの友人について語り、今度はその友人が自分の友人のなかのひとりを選び、これを続けるのである。一九六二年の五月のことであった。）

…友情の鎖のなかに置かれますと、別の思想になれ親しませてくれた友人の哲学者たちの方へ行こうか、それとも生きた文学、すばらしい文学の方へ行こうか選ぶのに少し当惑しました。しかしこの「友情のリレー」ではひとりの男に向かわなければならないと考えました、二五年前、彼は私を文学に招いてくれたのです。当時私はディジョンにおりました。…彼、ジャン・レスキュールはすでに雑誌社の社長でした。それは『メサージュ』というすばらしい雑

誌で、友人たちの詩人の仲間に私が加われるのではないかと思ったのです。私は行きました、それから私たちはすばらしい友情をよせあいましたが、ときどき仕事の時間になると少し重い友情になりました。ですが、まさしく彼が私を文学の仕事に導いてくれたのです。それに彼は私の生徒になりました、私の公開講座に来たレスキュールの姿を想像してみて下さい。詩人たちといっしょに来ました。多くの場合、偉大な哲学者たちのことを忘れ、少し思いきって、そこでは詩人たちのために、ジャン・レスキュールの仲間たちのために話をしたと言わなければなりません。

ここには、古い友人の側からみた愛情の弱さのようなものがあると、長いあいだ考えてきた。さらに仔細にながめてみると、何も言わないようにするためにバシュラールが語らなかったことがあるという事実を告白しなければならない。私の確信していることは、彼に委ねた計画がおそらく引金になった、または、まだ散らばったままの考え方に突然反応を示す触媒になったことであり、あるいはむしろ彼が突然計画を立てたことである。あの日バシュラールはいままで自分の心を読んできたのとは異なったやり方で自分を読めると思ったのだろうか。客観的認識に占められた科学認識論者だった彼、その認識をまひさせ、迷わせるものを取り払わなければならない科学認識論者だった彼がそれとは異なったやり方で自分を読むことができると考えたのだろうか。非知識、喧噪、軽率などが意のままに動く領域をポエジーのなかに認めたのだろうか。とにかくその作品の後で文学の仕事の長い調査にはいり込んで行ったのは事実である。

公になったこの告白の最後をさらに引用してみたい。私の家に食事に来た際、マリーという名の年寄りの女中に給仕されたことを語っている。彼女の癖が彼を楽しませたのである。

私はいまだにあの食事会のことを忘れません、ちょうど、そこには、本当に活躍している詩人たちがいました（必

ずしも堅苦しい詩に専念する人たちではありません）。その折私たちは友情の本当の祝宴をくり広げました、私のような、そう、私がこれからなろうとするような年取った哲学者の習慣からは、いささかはみ出した祝宴でした。

この引用文で補いたいと思うのは、バシュラールの人生では友情がかなりの役割をはたした（彼とルプネル[24]を結んだ友情についてもふたたび取り上げるだろう）ことである。それから、死があまりにも間近に迫っているという重大性にかろうじて眼をそむけて、最後のフレーズの皮肉なほほえみを思い出さないようにしたのである。

そう、バシュラールの人生では友情が大きな役割をはたした。ここで私がたどるつもりの方法のなかで、この友情が本質的な要素のひとつになるのではないか、なるべきであると言えるのではないか疑いたくなるほどである。私にとってもまた友情は人生のなかで主な役割をはたしたし、いまもはたしている。私は友情にとてもめぐまれた。しかしながら目的のために個人的な信頼を求めてそれをより所にしないよう気をつけている。だがたとえ私の気持に逆らっても、客観的に判断するには冷静さが必要だなどとは思わない。（実を言うと、その反対だと思っている。）むしろ実存の真理を体験するには、無味乾燥した分析よりも魂の熱い動きの方がすぐれた道具になると言いたい。アニムスに対してアニマである。

「二人の人間がもし本当に理解し合いたいと思うならば、まず最初たがいに反論し合わなければならなかった」とか、「真理は議論の子供であって、共感の子供ではない」[25]ということばをたとえ思い出すにしても、私はドイツ人の直観の力や共感の神秘性の方が好きである。二五年のあいだ反論し合うのをやめなかっただけになおさらである。さらに彼自身も次のように述べているのだ。

「私の夢の批評の方法はすべて創造的な夢を共有しようとし、夢想の熱狂のなかで芸術家の後を追おうとするところにある。」（バシュラール『コスモスとマチエール』）

（続）

訳註

バシュラールの作品については原書の作品名だけをイタリック体で記しており、示されているページ数はすべて原書のものである。

(1) *Introduction à la poétique de Bachelard*（邦訳名『バシュラールの詩学序説』川瀬武夫訳）は『現代思想』一九八〇年四月臨時増刊号で全訳されている。

(2) Jean Lescure, *Un été avec Bachelard*, Nouvelle édition, 1983, Luneau Ascot éditeurs.

(3) アニマ　バシュラールの基本的な概念のひとつであり、アニムス（animus）とアニマ（anima）の関係から彼は夢想の世界と夢想家とを論じる。もともと両者はユングの用いた用語であり、アニムスが「精神」、アニマが「たましい」に相当するラテン語であった。なお、バシュラールによれば、ひとり静かな夢想にふける人間、そして孤独な幸福につつまれる人間はアニマの影響下にあるという。

(4) モンターニュ―サント―ジュヌヴィエーヴ通り（Rue de la Montagne-Sainte-Geneviève）パリ市内の五区にある通り。ソルボンヌ大学の近くである。

(5) エッケルマン（Eckermann 一七九二―一八五四）ドイツの文学者。ゲーテに献身的に仕え、ゲーテの談話を記録した『ゲーテとの対話』を書いた。なおゲーテとエッケルマンの関係についてバシュラールは、*La Flamme d'une chandelle*, P.U.F. p. 60―61 のなかで語っている。

(6) *L' Engagement rationaliste*, P.U.F. p. 7 なおこの文章は Le Surrationalisme と題された論文のなかにあり、この論文は当初 *Inquisition* 誌、一九三六年創刊号に掲載されたが、一九七二年 *L' Engagement rationaliste* におさめられた。

(7) パンプロンヌ（Pampelonne）Aveyron 県境近く、Tarn 県にある小さな村。

(8) *La Poétique de l' Espace*, P.U.F. p. 2.

(9) *L'Engagement rationaliste*, p. 11.

(10) ラフォルグ（Jules Laforgue 一八六〇―一八八七）本文は『伝説的寓話集』からの引用である。

(11) *La Flamme d'une chandelle*, p. 76.

(12) *La Poétique de la Rêverie*, P.U.F. p. 100.

(13) レ島（L'île de Ré）ラ・ロシェルの沖合にある島。
(14) モベール広場（Place Maubert）バシュラールの住んでいたパリのモンターニュ―サント―ジュヌヴィエーヴ通りの近く、サンジェルマン通りの側にあって、朝市の立つ小さな広場である。
(15) バシュラールは一九六二年一〇月一六日、パリで死亡した。
(16) ジャン・ヴァール（Jean Wahl 一八八八―一九七四）フランスの哲学者、詩人。
(17) Instant poétique et instant métaphysique in *L'Intuition de l'Instant*, Gonthier, p. 108.
(18) *L'Eau et les Rêves*, José Corti, p. 96.
(19) *La Terre et les Rêveries du Repos*, José Corti, p. 87.
(20) イタロ・カルヴィーノ（Italo Calvino 一九二三―）イタリアの小説家。『木のぼり男爵』など空想的な寓意小説を書いている。
(21) *La Terre et les Rêveries de la Volonté*, José Corti, p. 262 および *L'Air et les Songes*, José Corti, p. 286 に類似したことばがみられる。レスキュールの自由な引用かと思われる。
(22) *La Psychanalyse du Feu*, Gallimard, p. 14.
(23) *La Dialectique de la Durée*, P.U.F. p. XI.
(24) ルプネル（Gaston Roupnel 一八七一―一九四六）フランスの思想家。バシュラールのディジョン大学時代の同僚である。
(25) *La Philosophie du Non*, P.U.F. p. 134.